

以上の結果から

卵の確保人工化および稚仔の飼育はきわめて容易である。ただ餌料として活餌を要することは問題である。しかしながらこの点はテトラピヤ養殖と組み合わせる方法で解決される。すなから沿岸内水面或るいは陸上淡水池においてテトラピヤを高密度に繁殖させ、これを下方の海水面に、網仕切りか或るいはその他の方法で造成されたイカ養殖場に自然流下させ給餌する方法が考えられる。

69年度はこの様式を検討し、あわせて、放流事業の有効性を検討すべく、標識放流を実施したい。

3 魚類の種苗生産に関する研究マダイ仔魚の飼育管理について

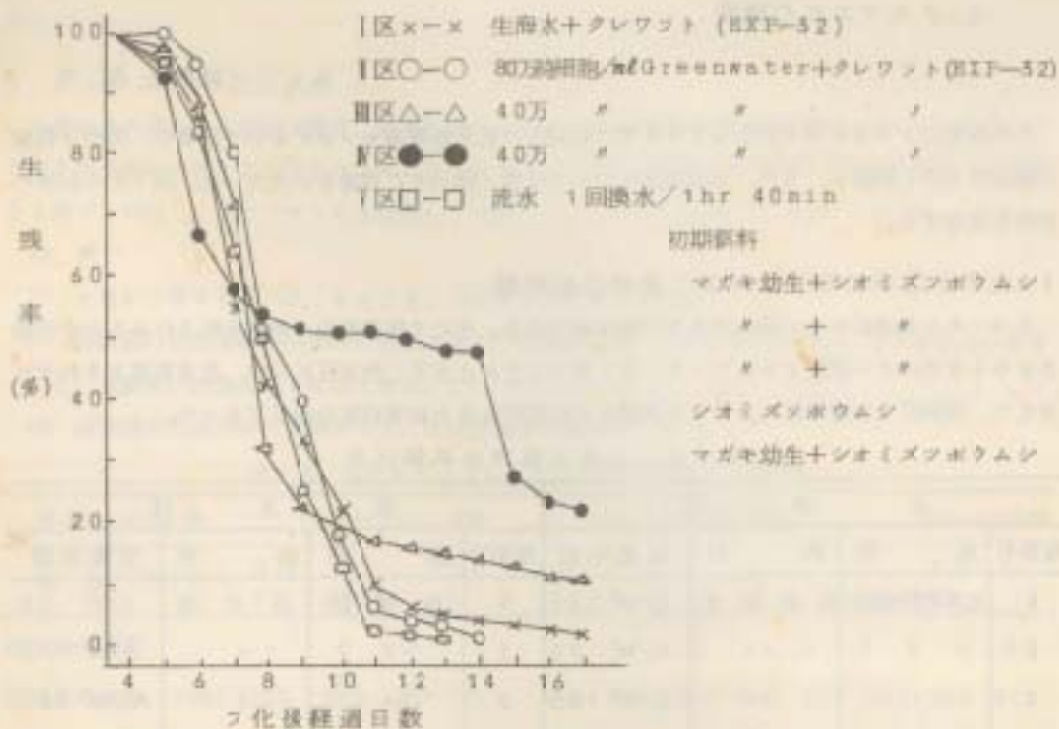
諸喜田 茂 充

この研究は1968年6月から7月までの期間、瀬戸内海栽培漁業協会伯方島事業場において研修中、同場鶴川正雄場長から課題をさずかりご指導をたまわった。また同場職員各位には有益なご教示をいただいた。

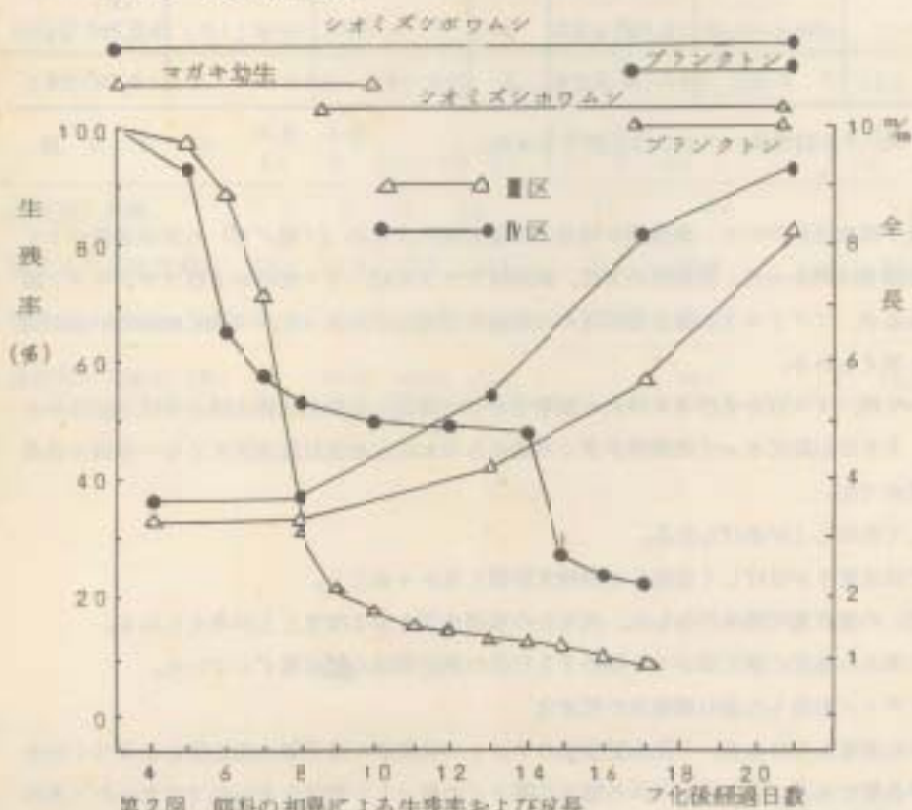
マダイ種苗の大量生産技術は近年かなり向上している。しかし解決を要する問題が多く残されている。そこで大量弊死の多い仔魚期の歩留り向上を目ざし、首題について試験を実施した。この結果の概要は次の通りであった。

結 果

- (1) 飼育水は約40万回細胞/ml程度のGreen-Waterを添加し、止水状態で弱いエアレーションをほどこした方がよかった。
- (2) 投餌し日後の摂餌状態はGreen-Waterを添加した方がよく、生海水区および流水区は摂餌していない個体が多かった。
- (3) 餌料ははじめからシオミズソウムンを与え(1)の飼育水で仔魚期を30%前後までの歩留りが期待出来た。
- (4) 成長はマガキ幼生を与えた区より、はじめからシオミズソウムンを投餌した区がよかった。



第1図 試験区別と残率



第2図 餌料の相異による生存率および成長